

ここまでわかったイネカメムシの発生や防除

○病害虫防除対策担当 酒井和彦
農業革新支援担当 村田大樹
病害虫研究担当 岩瀬亮三郎

近年、県内で多発が問題となっている「イネカメムシ」の発生状況・発生量の調査、発生生態の調査、薬剤防除の現地実証を行いました。

県内での発生量は県の東部、北東部で多く、県北部や県中部でも増加していることが明らかとなりました。病害虫防除所（病害虫防除対策担当）の調査では、前年と比較し、予察灯での誘殺数は約7.5倍、定点調査水田での捕獲虫数は6.5倍に急増しました。水田での個体数は8月中下旬以降に多く、移植や出穂時期の遅い水田でのリスクが高いことが示されました。

県東部の現地水田で行った薬剤防除の実証試験では、イネの出穂時期にエチプロール粒剤またはフロアブル剤（農薬名：キラップ）を、その3週間後までにジノテフラン液剤（農薬名：スタークル）を散布することで、成虫、幼虫の捕殺数が減少し、本虫による被害を大きく軽減できることが明らかとなりました。

県北東部の、移植時期の異なる水田が混在している地域での発消長を調査したところ、5月上旬移植（出穂期7月下旬）の水田では出穂期の3週間前には成虫の侵入が確認され、周辺のノビエ類の穂を吸汁する様子も観察されました。これより移植時期（≒出穂期）の遅い水田では成虫の侵入は出穂期頃で、餌として利用しやすい穂が存在する水田へ移動することが推察されました。一方、収穫後の再生株（ひこばえ）では10月上中旬まで発生が確認され、その後、水田から越冬場所へ移動するものと考えられました。

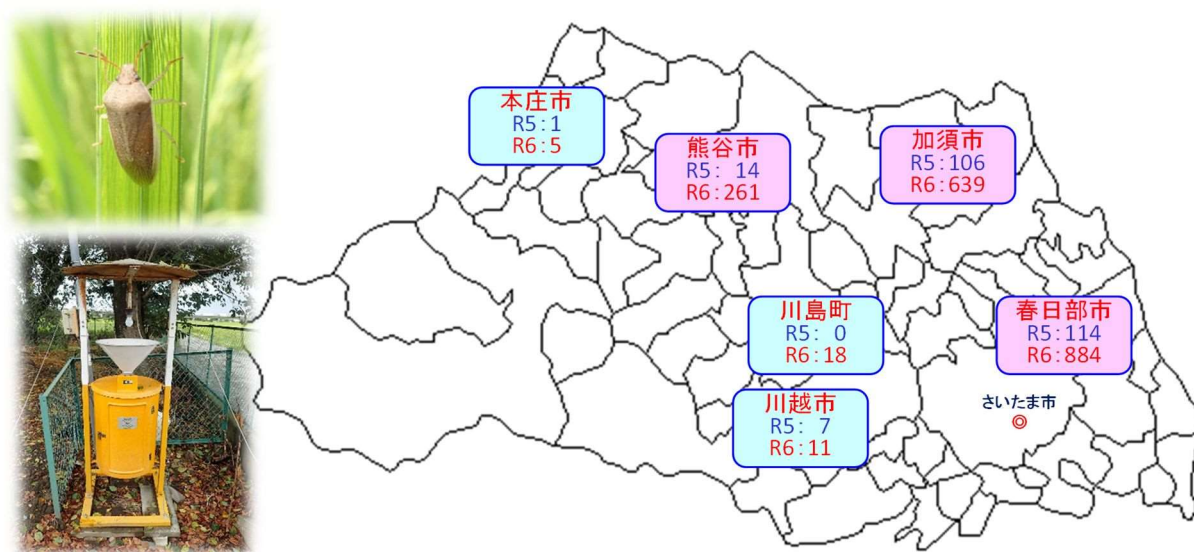


図1 予察灯(写真下)における成虫(写真上)誘殺数合計の本年と昨年との比較

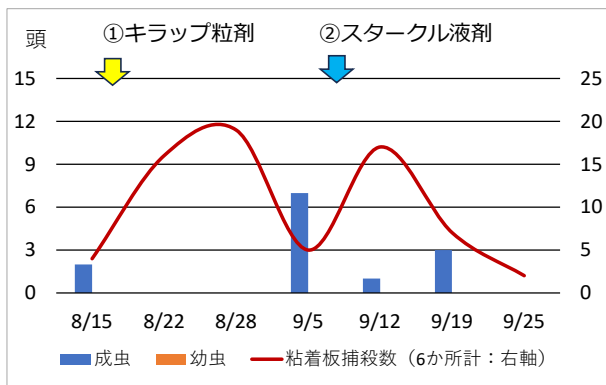
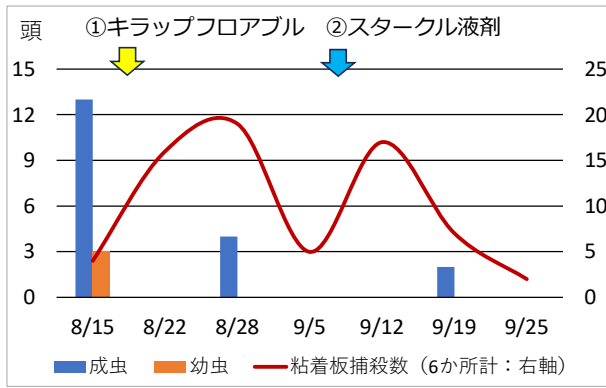


図2 現地での2回防除の効果
 上：フロアブル剤＋液剤
 下：粒剤＋液剤
 ※棒グラフはすくい取り調査
 曲線は圃場外周粘着板6か所の合計

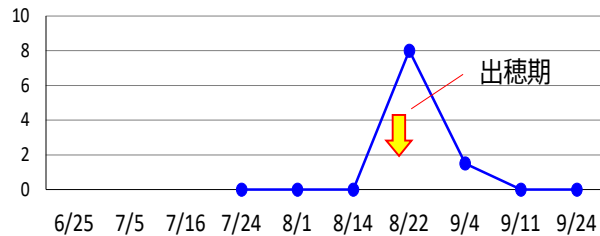
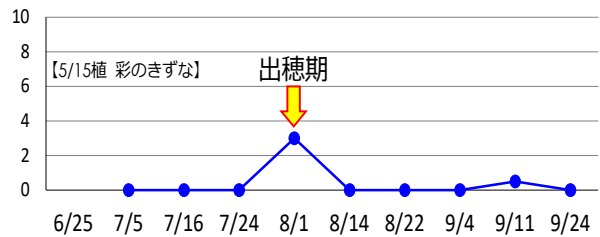
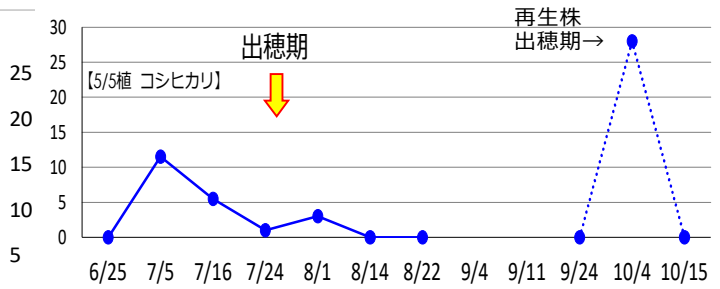


図3 出穂時期の異なる水田が近接している地域での成虫の発生消長

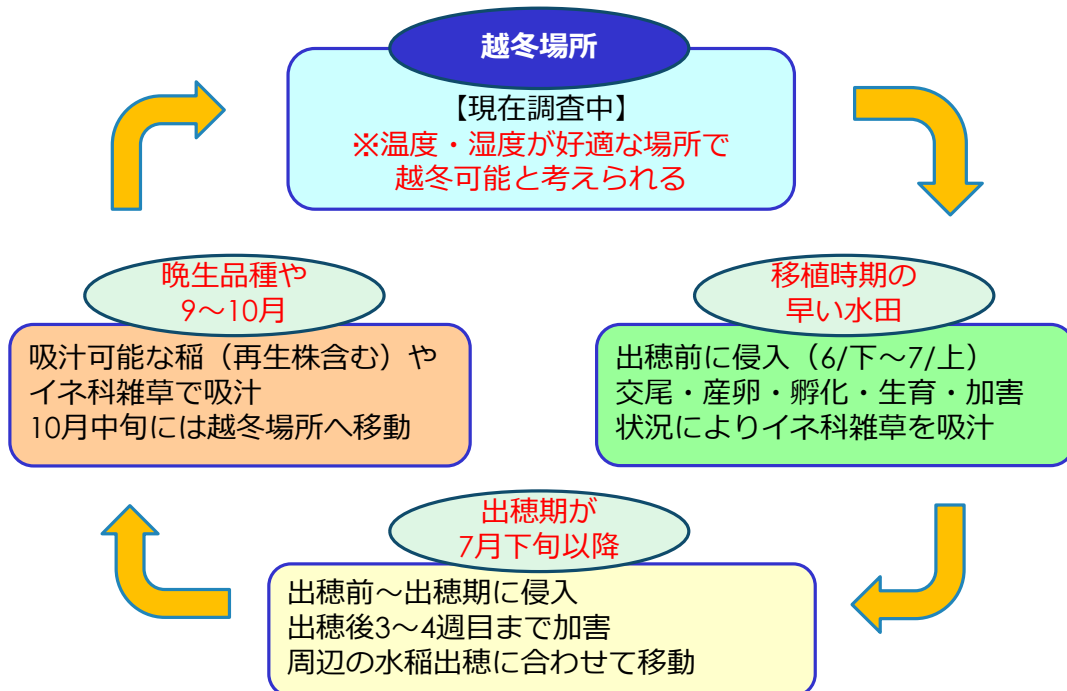


図4 イネカメムシの発生生態：農業革新支援担当と病虫害防除対策担当の調査より